切符

あきくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
切符

【Ｎコード】
Ｎ６２６８Ｃ

【作者名】
あきくん

【あらすじ】
“少し不思議”略してＳＦということで、ＳＦです。切符の独自解釈で友人にお土産を渡す話です。本当のところなんてわからないものです。

切符

男は海にやって来た。視界に入る水面は穏やかで、さらに見上げれば空は晴れ渡り、どこまでも広がっているようで空間を感じさせない。暖かく気持ちが良さそうな陽気に海。しかし、泳ぎに来たわけでも釣りに来たわけでもない男にはなんら関係も無く、ただ悪い気がしないだけだった。

「海だな・・・」

といっても、少し気を変えて海水でも触ろうと思っても、実際真下に数十メートル手を伸ばす必要があるのだから、どうしようもないというのが事実なのだが。

男は恨めしそうに、それでも海が一番近い場所に立った。通り抜ける潮風がまた気持ちいい。

男は軽く目をつむり静かに息を吐き出した。そして、

「こんなところで何のようだ？」

男は振り向きもせず少しばかり皮肉を込めて、自分をこんな崖の上に呼び出した友人の足音に声を掛けた。

「・・・いや、お前に渡すものがあってな」

自分の背中への答えに男が振り返ると、友人は閉じた手を男の胸の前に持ってきた。

「何？」

男の声を聞くが早いか友人は手を開き、

「これだ」

男が覗き込むより早くそのまま手を男の胸に当て、

「あの世への切符だ。受け取れ」

おもむろに力を込めて押した。

友人の表情には特別なものは見られず、それが計画性を感じさせ

る。そして、必死で内面を隠しているものであったとすれば、それが決心なのだろうか。しかし、男の視線が突然のことに焦点となるべきものを探しさまよっている以上、友人の感情を読み取れる者は誰もいなかった。

不意になくなる重力。そしてすぐに落下運動という形で、男は重力を取り戻したことを感じた。

定まった焦点は、先ほどまで触りたかった海が近づいてくることを教える。崖の上から見えた海とは違い、真下の海は岩に砕かれ荒々しく、これには別段触れたくも無かった。それでも抗うことも無く、飲み込まれた男が荒波にもまれ天を仰ぐ。しかし空はやはり晴れ渡りどこまでも広がっていた。男は吸い込まれるようにその空を見つめた。いや、空が自分を吸い込もうと見つめてきたと男は感じた。実際それが一瞬だったかもしれないが、それでも最後の絵としては上出来ではないだろうか。

「何かと旅は退屈だろ。これで雑誌でも買ってくれ」

友人はポケットから取り出した百円硬貨一枚を海に投げ入れた。

あの世とはどこなのだろう。男の意識は薄れて行く・・・。

「ありがとう娘さん。おかげで助かりました」

「いえ、元気になってよかったですね。見つけたわたしもうれしいですよ。そうだ。お友達には連絡しておきましたけど、あんな所でよかったんですか？」

「はい。では、早速友人に会いに行きますよ。渡すものがあるので・・・」

友人は海にやって来た。視界に入る水面は静かに張り詰め、そして空は晴れ渡り、透明な空気が空間の広がりを無限に感じさせる。何もかもが凍りつきそうな陽気に海。しかし、釣り目的以外でこんな季節に海に来た友人にとっては何の魅力も無く、ただ気分は悪かった。

「海か・・・」
どれだけ冷たいだろうか。それを確かめようにも、実際数十メートル手を伸ばすことなどできるはずも無く、なにより海を見ている余裕など無いのだった。
友人は、だから海に背を向けた。潮風が肌を刺すようだった。
友人は表情は変えずに目だけを見開いた。
誰かのいたずらかと淡い期待を抱いていなかったといえば嘘になるが、あの出来事を知る誰かがいることは確かなわけだ。だから友人はある程度の覚悟は持ってきたわけだし、当然最悪のことも忘れてはいなかった。もちろん、
「なぜお前が生きている・・・！」
考えたくも無いことではあったが。友人は男へのけん制を込めて、そして自分の動揺を振り切るように、少し強めの口調で先に口を開いた。
男は友人の数歩前で立ち止まると、一瞬軽く目をつむり静かに息を吐き出し、そして何事も無かったかのように友人に微笑みかけた。
「お前に突き落とされたおれが目を覚ましたとき、どこにいたと思う？」
――これはどこ行きの切符なんですか？
空に見つめられたあの時、薄れ行く意識の中男にはそんな声がきこえた気がした。
だから男は答えた。
――天国への往復切符ですよ。
と。
「なぜだ！？」
「なぜって、君からもらったのは、天国への往復切符だったんだよ。・・・天国を観光して戻ってきたってわけ」
「馬鹿なことを・・・」
友人には男が何を言っているのか解らなかった。あまりに唐突な男の質問と答えは、理解するにはあまりに情報が少なく、からかわ

れているのかどうかも判断しかねた。
「馬鹿は君だよ。どんな切符かちゃんと言わなきゃ、向こうの人が困るだろ？」
「ふざけるな！」
しかし友人には、男の話がどこか気持ち悪かった。落ち着いた男の様子が今のこの状況とのずれを感じさせ、不気味だった。
「港町の娘さんに助けられて今まで病院で寝ていた、と言えば満足か？　でもその間天国旅行を満喫していたわけだ。いや、蘇生処置が施されるまでの話かもしれないな・・・」
「どっちでもいい。そうだよ、お前は生きていて病院に担ぎ込まれただけなんだよ・・・。それでいい」
友人は必死で自分の現実を当てはめようとするが、
「どうだかね。でもそれが死ってことだろ。それに君が往復切符をくれた以上おれは必ずここに立っていたと思うよ」
男の話がその現実に食い込みそうで嫌だった。友人にはどうしても男の言葉の内面が理解できないのだった。男の意図ではなく、言葉の意図がだ。
「それが嘘だろ！　お前は死ななかっただけだ。何でつまらないことを言う必要がある。俺にそんなことを言って何になるんだ・・・！」
「何が怖い？　おれを殺し損ねたこと？　――それとも現実がわからなくなることか？」
男の言葉に友人は自分の感情を探る。それがどこか核心に触れているようで、どこか心に触れているようで、怖い・・・、いや、
「ちがう・・・」
解らない。
「いやいや。言葉って難しいね・・・。でもまああれだよ。小説にできるくらい詳しく聞かせてやろうか？」
男が一歩踏み出すと友人はすり足で下がる。小石や砂利が同質の物とぶつかり乾いた音を立てる。友人は地面の終わりを知り、そこ

に壁でもあり背中を押し付けているかのように、崖のふちぎりぎりで止まった。
「お前が怖い・・・」
そう、解らないから怖い。
「百円って雑誌買えないよ。だから君にお土産を、・・・そうそう売店もあったんだよ。で、もともと君の金だけど買ってきてあげたよ。そう、切符をね。――でも百円だから」
「何のつもりだ・・・」
友人は男の言葉など聞いていなかった。ただこの場から逃げたかったが、男の圧迫感は耐え難く、友人の体の自由を奪う。
「どうだかね？　せっかくだから正しい言い方を教えてあげるよ」
「何がしたいんだ！」
そうは言うが友人には解っていた。男の目的と、自分のここから逃げたいという願いが一度に片付けられるということを。
「地獄への片道切符をあげるよ」
男は友人をやさしく突き落とす。
男は微笑んではいなかったし、かといって憎しみを見せるわけでもなかった。たいしたことでもないものを当たり前に眺めているだけのようで、その何の感情も必要ない瞳を友人は瞬間視界に入れた。それを恐れるように、友人の眼球は乱れた動きを激しく見せた。
友人が少し触れてみたいと思った海は、近づいてくるも真下には無い。再び定まった眼前に迫るは暗い色。波しぶきが降りかかるが、それを感じるはずの感覚はもっと冷たい何かを感じていた。耳障りな鈍い音の一瞬後に友人がどこまでも続く天を仰いだとき、視覚で捉えることはすでにできなかった。
ごつごつした岩の上で、仰向けに寝そべる読み取るべき表情の無くなった友人。
男はそれをただ眺める。
「物事ははっきりわかりやすく言わないと・・・」
六文銭は持ち合わせていなかった。

了

（後書き）

２００７０９０６

こんな話ですが読んでいただいてありがとうございました。

パソコンが壊れたのをなんとなく放っておいたせいか、なんか久しぶりな感じがします。どうでもいいことですが、後書きってなんか書いてて楽しいものですね。

さて、現実なんて実際問題個々の話なのですから、それの真意なんて他人にはわかりません。一般的には、一般常識の範囲内のことを現実というのかもしれませんが、それはあくまで現実という言葉のことです。実際の出来事では、ありそうな嘘だったり、現実離れした本当の話だったり、ということが多々あります。

そこでわたしは思いました。やっぱりわからないや、と。いい加減な感じはしますが、究極的には信じるか信じないかが分かれ目ではないでしょうか。

感覚を柔軟に、そして広く持ちましょう。

ともあれ、感想をいただければ幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6268c/

切符

2010年10月8日15時19分発行